

「川崎市子どもの権利に関する条例」に基づいた子ども施策の推進

—より幅広い子どもの声をしっかりと受けとめるために—

川崎市教育委員会事務局 二瓶 裕児

1 子ども会議のあゆみ

川崎市では、1989（平成元）年に国連総会で採択された「子どもの権利条約」をもとに、子どもたちが実際に生活している場は地域社会であり、川崎の子どもに合った約束をつくるため、2000（平成 12）年、川崎市議会における全会一致の可決成立を経て、全国ではじめて「川崎市子どもの権利に関する条例」を制定、翌年 4 月から施行している。

条例制定にあたっては、子どもを含む多くの市民が参加し、200 回を超える様々な会議や集会がもたれ、約 2 年近くをかけて条例骨子案がまとめられていった。

こうした市民参加の背景として、1980 年代当時、校内暴力で荒れる学校や少年事件が多発し、川崎市でも深刻な事件が起き、教育の危機が指摘されるなか、地域からの教育改革をめざした動きが盛んにおこなわれ、こうした地域のチカラが条例制定の大きな原動力となっていった。

本条例の内容は、子どもの権利の保障を総合的にとらえ、権利の保障を実効性あるものにしていけるように具体的な制度やしきみを含んだ内容構成となっており、子どもの参加を促進していくための具体的な制度として、「子ども会議」を位置づけている。

2 “川子”って

川崎市子ども会議、通称“川子”が 2002（平成 14）年に第 1 期スタート。川子だけが子どもの参加となるのではなく、学校や施設等において子どもの参加が一層促進されることが大切であるが、本稿では、川子の取り組みを紹介していく。

川子は、条例第 30 条に位置づけられ、コロナ禍においても途切れることなく開催し、現在までに第 22 期を数える。

「川崎市子どもの権利に関する条例」（抄）
（子ども会議）

第 30 条 市長は、市政について、子どもの意見を求めるため、川崎市子ども会議を開催する。

2 子ども会議は、子どもの自主的及び自発的な取組により運営されるものとする。

3 子ども会議は、その主体である子どもが定める方法により、子どもの総意としての意見等をまとめ、市長に提出することができる。

4 市長その他の執行機関は、前項の規定により提出された意見等を尊重するものとする。

5 市長その他の執行機関は、子ども会議にあらゆる子どもの参加が促進され、その会議が円滑に運営されるよう必要な支援を行うものとする。

川子は、市政について、子どもの意見を求めるために開催し、子どもたちの主体的な取り組みにより運営され、検討テーマの設定や具体的な市への提言内容などは、すべて子どもたちが検討する。2024（令和 6）年 1 月現在、川子登録メンバーは 37 人、公私の区分なく、公募で集まった市内在住・在学・在勤の小学校 4 年生から 18 歳までの子どもが参加し、毎月 1・2 回の会議を通年で開催。これまでの検討テーマを見ると、「給食の食べ残し削減」、「川崎市の良いところ探し」、「ストップ温暖化」など、学校生活や社会問題といった身近なテーマが見受けられる。



募集チラシ

試行錯誤を繰り返しながら、20 年を超える期

間にわたり、子どもたちのことを第一に取り組んできた結果、異年齢との対話や活動の機会を通じて、他者の権利や多様性を尊重し合い、共生・協働の精神を育み、自ら課題解決に向き合うなど、川子が子どもたちの成長機会の場になるとともに、子どもの権利尊重のシンボリックな役割を果たし、子ども時代に参加したOB・OGが今では運営を支えるサポーターとして活躍いただくなど、大きな財産となっている。

また、学校では「ありのままの自分を表現することが苦手」な子どもたちにとって、自分を表現できる居場所としての機能も有している。



川子の様子



第21期報告書

大きな財産が蓄積されてきた一方で、20年の歳月のなかでは、習いごとなどが生活のウエイトを占めるなど、子どもたちの生活スタイルも変化していった。また、川子が通年で20回以上開催していることもあり、開催回数の多さなどから参加をためらうケースもあり、一時期は10名程度に減少し、幅広い子どもの声を聴けていないといった課題も浮き彫りとなってきた。さらには、子どもからの提言を受け、実態として受け取る形となるものの、その後、子どもの声を大切にしてきた市として、しっかりと受けとめ、広く子どもたちにフィードバックができてきているのか、といった懸念が生じてきたのも事実である。

3 子どもの声、聴けているか

先述の課題や懸念に対し、当然ながら議論も重ねていたのだが、おとなが課題解決に向けた分析の結果は、参加形態に対するニーズの変化、デジタルネイティブ世代の意見表明手段の多様化といったものだった。いかにも行政マン的な発想であり、そもそも子どもの参加や意見表明等を考えるに際し、主体である子どもの声を聴いていないといった状況であった。そのため、条例を読み返し、2022（令和4）年に、小中・高等学校および特別支援学校において、「子どもの声を受けとめるしくみづくりアンケート」を実施。子どもたちからは、「意見表明をする方法がわからない」という理由のほかに、「子どもの声が反映した事例を聞いたことがない」、「意見を言ってもおとなだけが決めると思う」といった回答が寄せられ、意見表明に対する期待感が薄れている厳しい結果であった。

アンケート結果や川子へのヒアリングにより、改めて課題への対応案を整理した。

■参加や意見を聴く機会のバリエーション

- ・年齢や関心の度合い、生活スタイルなどにとらわれず、参加の裾野を広げる
- ・1日でも参加できる形態

ただし、複数の機会を個別に実施すると、幅の狭い意見になってしまう懸念があるため、相互に補完し合えるよう、一連の取り組みとして展開することが望ましい。

■おとなが想像力を働かせ、真意を聴きとる

- ・子どももおとなもパートナー
- ・子どもの意見の真意に向き合う努力

子どももおとなも同じ時代・同じ場所で生活する市民であり、いっしょに考える機会を創出する。このとき、成長過程における子どもの発達段階を考慮し、語彙力や自身の経験など多様であることから、言語化された表面だけを見るのではなく、子どもの声の真意を想像し、理解しようとする努力が必要である。

具体的な事例として、「公園を広くしてほしい」と「公園を増やしてほしい」という声に対し、表面だけを捉えれば「用地に限りがあり難しい」となってしまうが、子どもたちとの対話により、その真意は「ボール遊びや鬼ごっこがしたい」という思いに気づくことができる。

4 しっかり受けとめるしくみへ

これまでの川子は、おとなは基本的に一切口を出さず、子どもたちができることを中心に検討・実践し、その結果をまとめて市長に報告する形であった。子どもからの意見のなかには、すでに行政で取り組まれているものもあり、関連する施策や事業計画などの情報がうまく伝えられていない可能性があった。

事実、川子の子どもたちからは、「おとな同士なら意見に対して話し合いをするのに、子どもの意見に対しては「いい意見だね」と褒められ、認められるだけで、意見に対して話し合われる機会がない。これで本当の意味で子どもの権利が尊重されているのか」、「子どもの声がすべて正しいとは思っていない。実現できないこともあると思うので、できない理由や課題になっていることを教えてほしい。」といった声があげられた。

施策への反映は重要なテーマである。片方の権利や主張だけでは実現不可能であり、さまざまな立場のおとなと対話の機会を設けるなど、参加や意見を聴く機会のバリエーションを増やすとともに、相互に理解しながらパートナーとして考える機会の創出をめざし、その第一歩として、2022（令和4）年12月、「カワサキ☆U18」を開催した。

5 カワサキ☆U18

子どもたち個々の生活スタイルや思いがあることを鑑みると、1つの企画ですべてを網羅する理想的な取り組みを実現することは不可能と考える。参加の裾野を広げ、多くの子どもたちの声を聴くしくみや、参加する子どもたちが、さらなる意義や魅力を感じ、主体的に意見表明ができる場づくりをしつつ、子どもの声を受けとめる段階ごとに、子どもの達成感や充実感が期待できる企画を実施し、それらをつなぎ合わせて一連の取り組みとして展開する方法を模索した結果が「カワサキ☆U18」である。

U18の開催にあたり、まず、小中・高等学校および特別支援学校の児童生徒に、「どんなことを話し合いたいですか？」と広くアンケートを実施。これまでの川子では、参加している子どもたちだけでテーマを検討していたが、U18では、広くテーマを募る方法とした。

子どもたちからは、「ボール遊び」、「給食」、「学校で使用するデジタル端末」に関する回答が大勢を占め、子どもたちにとって身近な課題であることがうかがえる。

個人の意見表明を経て、参加の裾野を広げ、おとなが子どもの真意に気づくために、子どもと市長がパートナーとして直接話し合う機会としてU18を開催。参加者は、アンケート回答の有無によらず、公募により1回限りの参加も可能とした。また、アンケートでは話し合う際に工夫してほしい点も聞いており、「学校のクラスと同じくらいの人數で話し合う」、「ニックネームで参加」などの声が寄せられた。



カワサキ☆U18

U18 では、3つのテーマから、子どもと市長との対話により、年間を通じて検討するテーマとして「デジタル技術でかなえる未来の学校スタイル」が決定した。

その後は、川子の定例会議で検討を深化させていくこととしながら、多くの子どもとおとなが相互理解を図っていききたいとの思いから、PTA、企業や地域団体にも参加いただき、「カワサキ☆U18 夏休み特別企画」を開催。こうした企画のなかから、子どもたちのもっと GIGA 端末を有効に活用したい、デジタル技術を向上させたいといった思いを受け、GIGA 端末における閲覧制限の緩和、地域のなかでプログラミング教室の開催など

の流れも生まれており、相互理解などの検討経過も含め、子どもたちへのフィードバックに一定の効果が表れてきている。

本市では、これまでに検討してきた課題解決の方向性を踏まえて、これまでの川子をベースに U18 を組み込み、一連のしくみとして着手したばかりであり、今後も子どもの声を聴きながら、より幅広い子どもの声を、もっとしっかり受けとめるしくみづくりに試行錯誤しながら取り組むこととした。

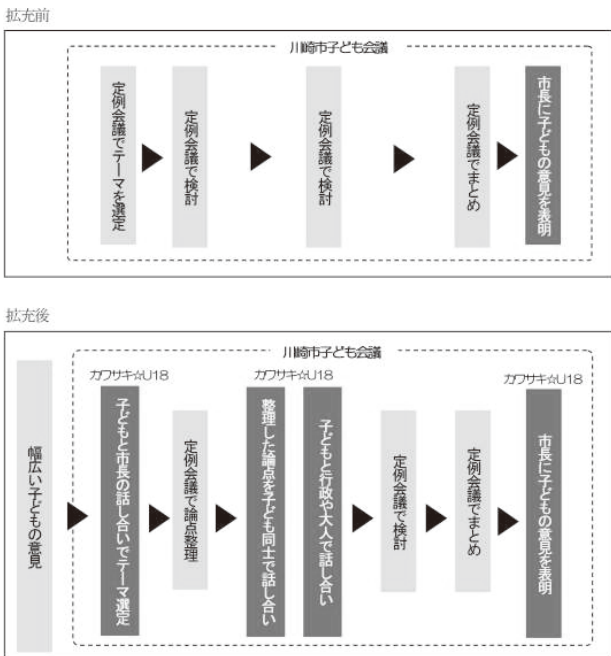
おわりに

本市の取り組みを紹介してきたが、着手したばかりの U18 でも複数失敗事例がある。夏休み特別企画は夏季休業期間中に 2 回実施したのだが、子どもたちからは「夏休みはいろいろあるので、1 か月経つと覚えていない」、行政の取り組みなどをわかりやすく説明しようとしたところ、「学校の授業みただし、その情報は知っている」など、言われてしまったことも。

こうした事例も、実際に取り組んでみてはじめて分かるものであり、おとなが考えすぎて窮屈になるのではなく、実際に子どもの声を聴くことが成功の近道であり、引き続き、妥協ではない最適解を模索し続けていきたい。

川崎市子ども会議のページ：

<https://www.city.kawasaki.jp/880/category/10-8-1-0-0-0-0-0-0.html>



川崎市子ども会議（新旧比較）